

新刊書展示 < 源氏物語千年紀 >

5月19日～6月21日 於：人文科学系図書館

2008年は、源氏物語千年紀です。『紫式部日記』寛弘5年(1008年)11月1日に「藤原道長が源氏物語の草稿を持ち去った」という記述があり、源氏物語がすでに宮中で評判となっていたことがわかります。その後『源氏物語』は、現代ではアーサー・ウェイリーの英訳(1928)、中国語訳(1965)、ドイツ語訳(1966)、韓国語訳(1999)などに翻訳され世界の古典のひとつになっています。

この5月には立教大学文学部の研究者が中心となって『源氏物語と江戸文化 - 可視化される雅俗』が出版されました。また、同書と関連の深い『フランス語訳 源氏物語 Le dit du Genji』がパリのディアンヌ・ドゥ・セリエ社から昨年刊行されており、両図書を展示いたします。後者については、異文化コミュニケーション学部の小倉和子先生に書評をお願いしました。

『源氏物語と江戸文化 - 可視化される雅俗』

小嶋菜温子・小峯和明・渡辺憲司編 森話社 2008.5

< 内容紹介 >

日本古典文学の一つとされる『源氏物語』は、今日の日本社会と文化状況においてどのような意味を持っているのだろうか。2006年・2007年に開催した、立教大学とパリのフランス国立東洋言語文化大学 INALCO での連続シンポジウムに基づいた論考。

< 幻の「源氏物語絵巻」をもとめて >

2005年度から始めた立教大学学術研究重点資金SFRおよび文科省科研基盤研究Bによる調査(ともに研究代表者;小嶋菜温子)によって、ニューヨーク・パーク財団コレクションのなかに、源氏物語絵巻の「賢木(さかき)巻」の断簡があるのが発見された。(稲本万里子・小嶋菜温子により)

またもうひとつの新資料は、『フランス語訳源氏物語』を編集したフランスのレジエリー氏によって発見された個人蔵の「ベルギー本 賢木巻断簡」である。石山寺本末摘花やスペンサーコレクション本などとの関連から考えると、「幻の源氏物語絵巻」が浮かび上がり、国宝をしのぐ40巻を越すような絵巻の構想があったのではないかと想像される。「藤壺の出家」と「韻塞ぎ(いんふたぎ)」の場面などについて、日本美術史と古代文学の立場から論じられている。



背景の図書は「徳川本 源氏物語画帖 土佐光則筆」(複製)

< 目次 >

序文『源氏物語』と江戸文化 小嶋菜温子 / 幻の「源氏物語絵巻」をもとめて 稲本万里子×エステル・レジエリー=ポエール×小嶋菜温子 / パーク財団蔵「源氏物語絵巻」賢木巻断簡について 稲本万里子 / 『源氏物語』の絵入り写本 石川透 / お伽草子と説話世界の『源氏物語』 小峯和明 / 『源氏物語』享受における和歌と絵画 鈴木健一 / 近世和歌と『源氏物語』 加藤睦 / 交錯する雅俗 寺田澄江 / 西鶴 / 長嘯子・芭蕉の『源氏物語』享受 中嶋隆 / 『源氏物語』と『色道大鏡』 渡辺憲司 / 鯛売りの語る『源氏物語』 宮腰直人 / 柳亭種彦『修紫田舎源氏』と源氏絵 佐藤悟 / 源氏供養と普賢十羅刹女像 武笠朗 / 『扇の草子』に見る十七世紀前後の『源氏物語』享受 安原眞琴 / 源氏文化から葦手のポエティックスへ ブリッセ・クレール碧子 / 元禄歌舞伎と『源氏物語』 加藤敦子 / 江戸の見立て絵と女三宮 渡辺雅子 / 近世屏風絵の趣向 川名淳子 / 摺物・柳々居辰斎画「天兇図」について 馬場淳子 / 図像・ジェンダー・源氏文化 小嶋菜温子 / 『源氏物語』享受の射程 池田忍 / 『源氏物語』と文化共同体 鈴木登美 / 『源氏物語』の文化イメージとヴィジュアルティ 中川成美 / アカデミズムと大衆文化 立石和弘 / 『源氏物語』と女訓書 ジョシュア・モストウ / 物語は亡霊たちを Delete したか 西野厚志 / 主要文献と解題 丹羽みさと・長谷川範彰・青木慎一 / あとがき 小峯和明

『フランス語訳 源氏物語』

(Le Dit du Genji de Murasaki-shikibu Illustré par la peinture traditionnelle japonaise = 日本伝統絵画による挿絵付フランス語版源氏物語)

ルネ・シフェール訳/エステル・レジェリー=ボエール解説

全三巻 別冊、Diane de Selliers 社 2007 刊行

フランス国立東洋言語文化大学 INALCO のシフェール氏による仏訳を元に、12 世紀から 17 世紀にかけての源氏絵 520 点と部分拡大図 450 点を収録し、7 年がかりで出版された。先の『源氏物語と江戸文化』所収のベルギー本の賢木巻の断簡の挿絵も含まれている。

フランス文学と源氏物語

異文化コミュニケーション学部教授 小倉和子

「なんと鮮やかな！」これが、昨秋パリのディアンヌ・ドゥ・セリエ社から出版された仏訳『源氏物語』を目にしたときの第一印象である。7 年間かけて、日米欧の 30 を超す美術館、寺院、個人所蔵の作品が調査され、そこから厳選された源氏絵は、ルネ・シフェールの仏訳(1988 年初版)とともに、世にも稀なる美しい本として甦った。

今年千年紀を迎える『源氏物語』は、たしかに日本文学の最高峰であるだけでなく、世界文学を代表する古典的名著でもある。

「恋愛は 12 世紀の発明である」と言ったのは、フランスの歴史家シャルル・セニョボスであるが、なるほど、南仏に登場した宮廷詩人たちによって宮廷風恋愛がヨーロッパ各地に広まっていったのは 12 世紀になってからだ。中でも、人間の情念を余すところなく描き出した『トリストアンとイゾー』の美しくも悲しい物語は多くの異本を生みだし、ジャンルを超えた芸術創造の源にもなってきた。しかし、それより 1 世紀以上前に、すでに『源氏物語』はフランス近代の心理小説に勝るとも劣らぬ完成度をもって男女の心理の綾を描き出し、今なお、国や時代を越えて人々に読み継がれている。そればかりか、マルグリット・ユルスナールなどは、空白の「雲隠れ」の巻について想像力を膨らませ、視力の衰えた晩年の源氏の君のもとを訪ねて愛を勝ち得ようとする花散里の挿話を書き込んだりしている(『東方綺譚』所収)。20 世紀フランスの作家による自然描写は、紫式部のものとはまた別の深い味わいがある。

セリエ版『源氏物語』は、世界の文学遺産を一流の挿絵とともに年に 1 冊ずつ刊行するという、なんと贅沢な美術出版社のおかげで実現した。ダンテ、セルバンテス、ボードレールなどと並んで、ヨーロッパ以外の文学作品としてははじめて『源氏物語』が取り上げられた。12 世紀から 17 世紀に描かれたさまざまな流派の源氏絵が一堂に会している点も興味深く、その中には、江戸時代に制作されたまま散逸し、「幻の源氏物語絵巻」とされてきたものからの挿絵も含まれている。Manga や sushi に始まった日本ブームが、このようなかたちで深化し、文化遺産の発掘につながるの、じつに喜ばしいことである。

